

A-7

談話の能格性は文法の能格性を形成するか？

角田太作

要旨

Sacapultec Maya（グアテマラ）には形態的能格性がある。Du Bois (1987)はこの言語の談話資料を検討して、話の中の人物を名詞で表す頻度も、新しい人物が現れる頻度も、能格性(S/O vs. A)を示すと論じた。このことを根拠に、談話の能格性は文法の能格性を形成すると主張した。Warrongo（豪州）には、形態的能格性だけでなく、統語的能格性までもある。Du Bois の主張によれば、Warrongo の談話は Sacapultec Maya の談話よりも一層明快に能格性を示すと予想される。Warrongo の談話資料を検討した結果、予想に反して、能格性を示さなかった。従って、談話の能格性は文法の能格性を形成するという主張を支持しない。

1。Sacapultec Maya と Warrongo は、形態・統語の面では、能格性に関して、表 1 で示した違いがある。

表 1

| | Intra-clausal ergativity 形態的能格性 | | Inter-clausal ergativity 統語的能格性 | |
|-----------------|-----------------------------------------|----------------|------------------------------------|--|
| | Case of A, S, O | Crossreference | | |
| Sacapultec Maya | – | A vs. S/O | – | |
| Warrongo | nouns: A vs. S/O pronouns: A/S vs. O | – | + | |

2。表 1 が示す通り、Sacapultec Maya では動詞が能格型の一致を示す。従って、intra-clausal ergativity 形態的能格性がある。Du Bois (1987)はこの言語の談話資料を検討して、以下の事実を示した。

事実 1。話の中の人物の表し方の頻度について。代名詞でもゼロでもなく、名詞で人物を表すのは、他動詞主語(A)の例の全体の 6.1%である。一方、自動詞主語(S)の例の全体の 48.1%で、他動詞目的語(O)の例の全体の 45.8%である。この頻度の違いは、能格性(S/O vs. A)を示す。

(1) 話の中の人物を名詞で表す頻度：S, O > A

S (48.1%), O (45.8%) > A (6.1%)

事実2。新しい人物が現れる頻度について。新しい人物が現れるのは、他動詞主語(A)の例の全体の 3.2%である。一方、自動詞主語(S)の例の全体の 22.5%で、他動詞目的語(O)の例の全体の 24.7%である。この頻度の違いも、能格性(S/O vs. A)を示す。

(2) 新しい人物が現れる頻度：O, S > A

O (24.7%), S (22.5%) > A (3.2%)

(1) と (2) に基づいて、Du Bois (1987)は、以下の仮説を提案した。

(3) 仮説：談話の能格性は文法の能格性を形成する。

3。その後、Haig & Schnell (2016)等、多数の研究が、英語等、多数の言語について、(1) と (2) を検証した。(1) と (2) と同じ傾向を示す言語は極めて少ない。Sacapultec Maya は例外的である。従って、(1) と (2) は普遍的ではない。一方、(3) を検討した研究は殆ど無い。私の知る限り、Haig & Schnell (2016: 614-615)だけである。

4。表1が示す通り、Warrongo では名詞の格は能格型である。従って、形態的能格性がある。更に、主節と従属節の間の同一指示名詞句の省略も能格型である。従って、統語的能格性までもある。正に、能格言語らしい能格言語であり、能格言語の代表と言える言語である。一方、Sacapultec Maya には統語的能格性は無いようだ。(Warrongo の統語的能格性の例を、以下の Appendix で示す。詳細は Tsunoda (2011: 431-438)を参照されたい。)

もし(3)の仮説が妥当なら、Warrongo のように形態的能格性だけでなく、統語的能格性までもある言語の談話は、Sacapultec Maya の談話よりももっと明快に能格性を示すと予測される。統語的能格性は世界的に希である(Dixon 1994: 175-180, Tsunoda 2011: 445)。従って、Warrongo は Du Bois の仮説を検証する貴重な機会を提供する。幸いなことに、私は6時間40分のテキストを録音して、文字化してある。

Warrongo の談話資料を見た結果は以下の通りである。

話の中の人物を名詞で表す頻度について検討した結果を表2に示す。

表 2。

| | 名詞 | | 代名詞 | | ゼロ | | 総数 | |
|---|-----|------|-----|------|-----|------|-----|------|
| | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % |
| A | 31 | 5.4 | 284 | 49.4 | 260 | 45.2 | 575 | 100% |
| S | 107 | 17.5 | 239 | 39.1 | 266 | 43.5 | 612 | 100% |
| O | 225 | 39.6 | 99 | 17.4 | 244 | 43.0 | 568 | 100% |

他動詞主語(A)の例は 5 7 5 ある。その中で、代名詞でもゼロでもなく、名詞で人物を表すのは 3 1 ある。全体の 5.4%である。自動詞主語(S)の例は 6 1 2 ある。その中で、名詞で人物を表すのは 1 0 7 ある。全体の 17.5%である。他動詞目的語(O)の例は 5 6 8 ある。その中で、名詞で人物を表すのは 2 2 5 ある。全体の 39.6%である。この結果は $O > S > A$ の階層を成す。能格性(S/O vs. A)を示さない。

(4) 話の中の人物を名詞で表す頻度： $O > S > A$

$O (39.6\%) > S (17.5\%) > A (5.4\%)$ 。

新しい人物が現れる頻度について検討した結果を表 3 に示す。

表 3

| | New | | Accessible | | Given | | 総数 | |
|---|-----|------|------------|-----|-------|------|-----|------|
| | 数 | % | 数 | % | 数 | % | 数 | % |
| A | 24 | 4.1 | 3 | 0.5 | 556 | 95.4 | 583 | 100% |
| S | 26 | 3.6 | 2 | 0.3 | 700 | 96.2 | 728 | 100% |
| O | 109 | 19.7 | 19 | 3.4 | 426 | 76.9 | 554 | 100% |

New: 新しい人物

Given: 古い人物

Accessible: 新しい人物と古い人物の中間的な人物

他動詞主語(A)の例は 5 8 3 ある。その中で、新しい人物は 2 4 ある。全体の 4.1%である。

自動詞主語(S)の例は 7 2 8 ある。その中で、新しい人物は 2 6 ある。全体の 3.6%である。他動詞目的語(O)の例は 5 5 4 ある。その中で、新しい人物は 1 0 9 ある。全体の 19.7%である。この結果は $O > A, S$ の階層を成す。これも能格性(S/O vs. A)を示さない。

(5) 新しい人物が現れる頻度： $O > A, S$

$O (19.7\%) > A (4.1\%), S (3.6\%)$

Warrongo の談話資料は、上記の予想に反して、(4) (話の中の人物を名詞で表す頻度)でも、(5) (新しい人物が現れる頻度)でも、能格性を示さない。この点では、Du Bois (1978) の後の研究が対象とした言語の大多数と同じである。従って、Warrongo の談話資料は、(3) の仮説を支持しない。Warrongo が正に、能格言語らしい能格言語であり、能格言語の代表と言える言語であるにも関わらず、である。従って、(3) の仮説の有効性をかなり弱めたと言える。

5。(3) の仮説は、談話と文法(形態・統語)の関係についての仮説である。(3) の仮説は、もっと一般的に言えば、談話が文法(形態・統語)を形成する(場合がある)という仮説である。Warrongo の談話資料は、(4) と (5) に関しては、この仮説を支持しない。談話が文法(形態・統語)を形成しない可能性がある。しかし、この仮説は魅力的であると思う。談話が文法(形態・統語)を形成する場合が無いとは断定できない。更なる精査が必要である。この仮説を支持する場合があるかもしれない。

談話と文法(形態・統語)の関係については、別の問題設定が可能である。それは、「文法(形態・統語)のタイプの違いは談話構造の違いに反映するか？」という問題設定である。これは一見簡単に見える。しかし、実証するのは大変困難である。一つの言語を見る研究には限界がある。様々な言語を見る必要がある。

Appendix: Syntactic ergativity and syntactic accusativity

以下で、統語的能格性 syntactic ergativity を、統語的対格性 syntactic accusativity と比較しつつ、簡単に示す。便宜上、英語を用いる。

The examples given below concern so-called coreferential deletion. Square brackets indicate deleted words.

1. Syntactic accusativity employs the S/A pivot. Examples from English follow. (See Comrie (1978: 349-350) and Dixon (1994: 158-159).) As (3) shows, the passive construction can be used to maintain the S/A pivot.

- (1) A man_i (S) went and [the man_i (A)] speared a kangaroo (O). (S = [A]).
 (2) *A kangaroo_i (S) went and a man (A) speared [the kangaroo_i (O)]. (*S = [O])
 (3) A kangaroo_i (S) went and [the kangaroo_i (S)] was speared by a man. (S = [S])

2. Syntactic ergativity employs the S/O pivot. (See Dixon (1994: 160-172).) Examples from Warrongo follow (cf. Tsunoda (2011: 431-438)). When used in a subordinate clause, the purposive of a verb indicates purpose ('... so that ... may') or successive action ('... and ...'). The antipassive turns a transitive clause into an intransitive clause. As (6) shows, it can be used to maintain the S/O pivot.

- (4) bama-Ø yani-n yori-nggo [bama-Ø] nyaga-lgo.
 man_i-ABS(S) go-NF kangaroo-ERG(A) man_i-ABS(O) see-PURP
 'A man_i (S) went and a kangaroo (A) saw [the man_i (O)].' (S = [O])

- (5) *bama-Ø yani-n [bama-nggo] yori-Ø baba-lgo.
 man_i-ABS(S) go-NF man_i-ERG(A) kangaroo-ABS(O) spear-PURP
 '*A man_i (S) went and [the man_i (A)] speared a kangaroo.' (*S = [A])

- (6) bama-Ø yani-n [bama-Ø] yori-wo baba-gali-yal
 man_i-ABS(S) go-NF man_i-ABS(S) kangaroo-DAT spear-ANTIP-PURP
 'A man_i (S) went and [the man_i (S)] speared a kangaroo.' (S = [S])

Abbreviations

A - transitive subject; ABS - absolutive; ANTIP - antipassive; DAT - dative; ERG - ergative; NF - nonfuture; O - transitive object; PURP - purposive; S - intransitive subject.

引用文献

- Comrie, Bernard. 1978. Ergativity. In Winfred P. Lehmann (ed.), *Syntactic typology*, 329-394. Austin: University of Texas Press.
 Dixon, R. M. W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Du Bois, John W. 1987. The discourse basis of ergativity. *Language* 63(4): 805-855.
 Haig, Geoffrey & Stefan Schnell. 2016. The discourse basis of ergativity revisited. *Language* 92(3): 591-618.
 Tsunoda, Tasaku. 2011. *A grammar of Warrongo*. Berlin & New York: De Gruyter Mouton.